宇治拾遺物語

二

へ 12
4108
2

門へ12
4108
巻2

門へ利10
4108
巻1〜2

宇治拾遺物語巻第二目録

一 清徳聖きさく乃事
二 静親僧正形あ法ゝ事
三 同僧正大嶽乃岩祈事
四 金峯山蒲打事
五 用経あゝ丈事
六 原行死人を乗のり出事
七 鼻長僧乃事

佐藤藏書

佐藤藏書

八 瞎眼封藏人力將事
九 季通欲逐狹事
十 袴垂合保昌事
十一 明衡欲逢狹事
十二 唐卒於婆に血付事
十三 あるもの強力の事
十四 柿木に佛現ずる事

今はむかしせいとくひじりといふ聖乃あり きるうち母
れ死ぬりをれ死つきようち入て辛くひとりあるご
乃山ふもとにて大なる石をそのもとみなをさ
くうれうへよたの乃ひつき殺うちときて千年ぐらい
尼を片時尼をもむ時もなくうちぬるまもしをず物
をくくもて湯水もれまでこたもせず誦しまり
て代をりきこをめくるまもなりぬるれ今の春
迄めてをくうたくとて母のこゑうとて代
ぐら尼をかくるひろ痛ぬへ我父やく男子の中
ありて天くむまれあ かどだるのくに佛よるうて
告やうんとて今までハつをやさつとつるで今ハ佛よ

ありとく告ゲやとていのときこゆるときさ思ひくる事也
ムこハなやう成ぬるんとてぞりそてこそやきて
背ぞりあつめてうけ給ぞ上にねうとぞおもてく例
乃屋うふして京へ出ろ乃ち西京ゆきとおもく
おひくる所あり代屋こそして物ひとりゐるきれい石
まぐら打て食ものとハ思たう
とげする屋乃くすぐろに打くハあさまーと思ていた
かくハめすぐとていく屋ちしてくゆーき海にたるのやと
云時ゆきさらハさいうとぬぐくハさまをふーしもゆき海ふー
かんんでめ世といくとこすをぐろむぐくと
打くふこ乃ゆきハ三町ぞうりそうへたりをるゆかく

くくをいとあさまくくそうんやうを乃まかくてゆーにく
ゆハくくゆをめ世といくとそてうハいゆをく
おりにくく三町をさるのーくくにぬ乃おをあさ海
ぞう物くひつ屋きさ屋りをを思てぞぐ居さ世行く
物してめさをんをて白米をおりおて飯のて
くくを世くめをハぐーくろ物をくくをでぞりしたるにと
くくこ乃しくひて出くくいぬぐ男くくあさ海ーと思ひて
ゆをとくくくけるをゆ川坊城乃右ゆ大殿よ
人乃ろうとさいく世をれくいくのさはあらん乃くぬ
事くゆぐびて物くくくをてうんとおりてをうをん
乃くめりく物ゆいく世てみんとそよぐ世行ひをれを

いみじきをのろ屋あゆきさつるうれまろうと鐵屋高生虎
狼犬からす美乃多る獣ゐて千方とあゆこたてきて
きける鐵ちとくんまん月うと大うるまてゐまてきりる
ひとうとこれをうとゐかるぐんゐ付ゐてさしたこそい
みじきをうこうてゐきれめてゐしくかうて白米十
石をおとこ乃ゐてあてしきむりうちをに行ゐ
おけむゐあとうと入くくいくとをきてくを世ゐて
をれいたりうゐちくんるを鐵よくくをれいあつまり
てよ鐵さくをこ鐵くこい川屋いつ世くをでよろこび
く出ぬさをいこて寺くくんよいあくざるをけわ佛ゐを
乃角んじてありきゐやとかいきちをくんの月

まん寺くを屋ひとりてくのとをみきれいきゐ
あさましきまきりよかりひきちさて出てりりをりり
四赤乃ゐるゐ少鐵月ゐをどをまる鐵生うくをりうろ
しれたちりしくゐまいいいいの雲のやうよくうきゐとと
むまくくちくくくくとちちりしきれいけをてるくも
きくおりをてうりゐ乃ゐ鐵とをくるうける
を帝雪をゐてうれを糸乃蘭をいいいいをいうをいを
鐵をれくゐ鐵れ小路とをんやとをれをさらいいを
い錦乃小路と入りうあまりきくゐ鐵きゐ鐵と佛う
きをるうをしてを錦乃小路といいをる

今ハ昔延喜の乃れをき聖しかりをきて六十人の
貴僧をとめて大般若経よ[illegible]め給をるに僧た
ちをつかはすに[illegible]ハさんと云乃をたに
いるのに時まさに日つくてをれて帝を始
て大臣公卿百姓人民世一事にしかの歎きを
つをきり義人ひとめしよせて静歌僧正に仰
てをさをく祈雨文ゆゑ[illegible]めをくやうかくのこと
を方と身れ形代ををるをの座を立て別
よ壇乃ををよ立て行きかぐしめ奉るあれを
をを作をくるをりと仕てをさをれ久し静歌僧
正乃時ハ律師りてよ僧都僧正上臈た

おそしきを見て面目なきりなくして南殿乃洗階より
くだりて庭乃もとに北向にたちて香炉をひらき
て額に香煙をあてて祈せいし給ふ事みる人さへくるし
く思ほえり然日乃あそびしをえさし出ぬに滅をなかし
たちまちに我たちくわせいしたまへばいまだ香炉乃けむり
へあかりて扇子のかくれる雲にまうちに達磨八南殿に
おられける殿上人ハ千場殿にたちてみるに達磨八法
おハ善福門にかれてぬけたる雄にて雲むらなく
大空にたひかるたびに龍神震動し電光大千世界に
みち車軸乃ごとくふける雨滂て天下たちまちにうる
ほひ五穀豊饒にして草木果をむすぶ目出たき乃

人皆伏をおでとはなし帝大に云て尓随喜して僧
正を召し給ひつり不思議乃事なるかなと宗の奇特殊に
かくするを讃や
今は昔静観僧正ハ西塔乃千手院といふ所に住給ひ
けるが其所南に向ひて大嶽を守る所にてあり
けり大嶽乃乾乃方のそばに大なるいはあり其
岩のありさま龍乃口をあきたるやうにてありける乃
いは乃もとちかくすむひて住ける僧たち命もろくして
おほくしにけり志ばらくハいかにして志ぬるやらんと
心もゑざりける程にいは乃あるゆへぞといひたち
にけり此いは毒竜乃いはとぞいひけるて世のまとをかりける。

六月にはりて西塔乃あるさゝ原さてあれてのこゝあるを原
さるとゝりゝ乃ゝ手院ゝゝ人おゝくゝてゝけるゝいもゝん
ゝゝゝゝひゝゝりゝこのゝゝゝ鉢ゝゝゝまゝゝに鉢ゝ大口
ゝゝあゝゝゝゝにゝゝゝゝゝ人乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ僧西ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そもそもくもらたるかどに梅沢役あろうへの東
ちる乃佛はくらんとそてやく熊がいくかんとみおも
はくろをものありきるもよろこしく角とも申さし入
て行ぬむくやめすといひそれバくろえるをもちくる
うきとれきまへ七八千枚ちりはといひそれバをもちて
きなしゆるかとしえそばとて申とさわりかみとつくえ
きる熊より出しゆりくそれ風をとれたく色いえし
おりとかれまろげてかそへんとてそれちいさき文字
まて金剛嶽ことしとくもかくまさり心も西で
この乃りき海をハ何乃まつれつきつけそしとへいえく
そらかきつけもはをです何乃まつれ書つきとくんはくん

とのへたびんまありまつ熊又とまとてみまるに落うち
みまえとゆるとまるおきやをしき東かれとやすいて口
も再ておりず梅兆遠使これかひきらてさひとにあくす役
あるへきをそて友をとなびくさそ金をおかとれおくうり
をとらせて落打くして内裏のもとへさいりぬ伴乃
まさ光をとかくろもなれて別前ハおとろきそてくゆく河
原にいでゆいそてとへといえれそれハ梅兆遠使とそしかえ
らたゆいくよせとくかるところにてくれたくさらかさ
ね風うよそりつきてせ十歳乃かしら風なれハせ
なうめ紅乃ねりをとへと水とぬらしてきせゆるや
まこさくとみるまてありきる熊かさねて猿よ入るり

ましえ見づりし十日ばかりありてしばしきりぶ落をハ
金峯山より無事にしてとれ所よりまゐりけるとかり
清水へまうでまゐりけるとして人がちていよく件乃
金をとらんと仕りし人ありしあるなりけり

今ハむかし左京乃大夫なりける古上達部ありけり。
年おいていみじうふるめかしかりけり下わたり
なる家にありきもせでこもりゐたりけり其つかさ
乃さくハんにて紀用経といふもの有けり長岡に
なんすみける司乃目なれバ此大夫のもとにもきて
なんをとづれける此用経大殿にまゐりて贄殿
にゐたるほどにあはぢのかみよりちかが鯛乃あらまき
をおほくたてまつりける贄殿にもてまゐりたり贄
殿乃あづかりよしずみに二まき用経こひとりてまき
にたかくおきてよしずみにいふやうこれ人してとり
にたてまつらんをりにおこせ給へといひおく心中に思ひける
やうこれわがつかさの大夫にたてまつりてをとづれんと思
ひてこれをまきにおきて左京の大夫のもとにいきて見れ
ばかんの君でゐにまらうど人二三人ばかりきてあるじ
せんとて地火炉に火おこしなどしてわがもとにて物
くはんとするにはかばかしき魚もなし鯉鳥などよう
ありげなりそれに用経が申やう用経がもとにこそ津乃
国なる下人乃鯛のあらまき三もてまうできたり

はるかに仕つらかぶるしいもどしめでゐく
さかりにつきたるいまは二ほきハ家ぐらにてときてきうゐ
いろきてまうでつるあとにてをてきつりい
えざうはるかうさて今ゐるにつえさんハいうまとこ
さかくさうかに神をつくろうれて口ときうれ乃これを
ちくちやうと乃ちきてやせハうさるへきしれてゐき
ふいとうれまかれうくらるとふ屋れとの絵まらうど
れをちふ屋きを拠乃さふふさめるに九月ぐるとれ汚
ゐまとそさ乃はるれあらくひいとうー難ハまうさ
いでたもてよれ朝ハきい乃もしゐくいれあう用望ゐ
むうふうるうちくれよびゐて馬をハ出門乃ときり

つるぎて先ぐいまそしかと敵よ熟ゐ乃あつうハ
ゐうゐ乃をきつうあふぬきにをとせ結へとさうめ
きてうれうハされしてこうゐれうようれうえうれうを
ゐうとつさて俎あふひくをてまいまてこゐあかく
いれくゐうて用絵をふ乃包丁ハ仕んとうれてまれ
ぐーをぢり朝ゐる刀ぬれくまうをつあれ乃ハ
ハまうきぬやかうゐ瓜をるうりあうりをうしくと
いれかうる程よゐりつう童木乃えうよあうまれ
ゐうとはゆれいつまてをてきゐりいとかしおくあれ
とふつふとをうーつとてまうてれるううえれとかめ
うくゐうとてまうえいぬれ上ゐううをきておとくしく

大雞つくらんとうまれたる神ほとゝぎすひとつ引ぬ
ひとつ引ざるもてそゝるほとゝぎすはきくくく
ねのうてわくまうきこゝろあるゝ紙をしきりて刀をとりて鬱
をとゝしるくみうちくとはそこうまてかつるもれ
ゝあしだのるゝきをあるとらうげふるぐ
つゝこれはのっきうあるゝ用紙あきれくゝ刀まる
ぐをうちもてゝ當をて紀あへどなげていい
京乃うゝを客人をあきれくゝ同じ口をあきて
ねうりまへるさまくゝしたもあさまくて同紙を
かをているをねるうをていとあやしげ
くれとをはたるあうひをゝ紙をゝ降ぐゝ

ゝをうをうらあうたうゝ紙くゝうていぬ京乃をあ
ゝくゝをのゝ紙ハかくあをゝいをぬをまもれくるもと
ハをり寺をつまをゝ紙をゝをてゝ来むつひはれた
うゝとハかをくねをふへきあをもあゝ祝ハをとて
あうゝかゝほをゝ紙をゝてくうゝんをいうゝをへ武
をのあゝきゝハをうゝはきゝまをつをゝをかくゝふゝいに
世乃人きくはくゝへくゝ世はをうゝひをゝをんをとすん
とうゝをあふきをゝ紙をゝかきうゝ用紙を
るをのつをゝをせうゝをゝて廣をゝをゝて廣をあ
乃あつうゝをゝをあひゝをゝあゝま紀をゝ
ゝとわゝをゝんかゝうゝかをゝとゝをゝハかゝをゝかゝる幸

志いて行へうとおもきぬさうりはうしみのゝ志るまゝ
かぎりまでゝよりずゝんいくくさいさいかれ給ふとて
あゝ海きハ高まりて波あゝさ海よ宿よりさかりつゝて
をのゝをのこ共いふ所うち京のうれぬのもとから
あゝまたうまにをこせてゝハらうて夫ハうゝもよと
いふをきゝてまゝ今かりまいるとてみるにあゝ
まきはなれぬいつらいぬるそゝらふかゝくれ徒
ありつまゝこの海くせつゝ所うゝ所てゆてさつゝほゝ
といふつまゝさうよこ北しハあんなれときゝてゝるん侍ゝ
事乃所うゝとゝゝもそこつゝ人ゝさゝかいかくゝそゝこ
あづまをたゝんぬゝとよびくゝ見給へとゝゝ男を

よびくゝとゝんとするゝいてゝいとけり膳ゝる男
うゝ所ゝをおまうゝ所やに入ゆてきゝつまゝこれをう
ぬゝゝゝゝ乃まきにさゝけらまゝるあゝ海きこう
あまゝこはそうゝをきたくゝるゝん乃まうゝそゝとゝゝ法
れゝされゝまゝありつゝんたゝ京のさゝゝん乃ぬゝのやと
いふつまゝいさゝてハおゝ法ゝあゝすまゝべきやうあゝそ
うゝまゝゝゝて朝をゝゝ法きゝうゝさいゝまゝてゝゝうゝ
あゝゝ志きまゝひゝあゝゝさゝゝゝて入ゝゝ海きゝ法き
ゝゝとゝきゝ侍つまゝとかゝれハ用給きゝて志ゝうのし
海ゝとゝかぎりなゝゝ志乃ゝゝをきゝて入ゝくいゝかと
ハゝをゝまゝゝれ乃ゝ志ゝ用給志ゝまゝびくゝかくゝゝゝ

ちゝきんだちなどもありかゝりとれとしてく去黒乃ゐ
さをもなりうれのゝ左乗乃うれゐあうしも無いう
をもうけることやう

むゝ一右近将監下野原行といふものをけり。競
るまよくれつをもり。帰りもとりてめをうておうぐく
さをまもぐれくもうをもる朱雀院乃法はより村上の
れ門乃法ときなんとハさうにいみでき舎人をて人を
ゆるゝ品けり年をかくあるとて西京よりもみをり。と
ちうなうける人ゐそうに死ける。仏原行とふゝし
よ行てうれまあひくれ別乃ありひぐれまでと
あゝひきうまゐ仏をとおさんゝ門あき方

よむゝうりさうきをてをてあるべきようあらず門う
こをおもをべきまりうてあれとてふををて原りういふ
屋ゝあゝき方よりいをさんあをゝにをるべゝうを
かゐをあまう乃法よりあくめあをまいまをゝかう
べゝ原行のへゝて乃垣ををふゝをてうれうりいゝ
をゝうんゝゐハいき法をもゝ時をまをあをてゐ法
乃をあうゝ人ゝかくふかうをふをもうれ忍を乗じ
ア法をハなよ法をゐてのもゝひアさんをいを八
ゐ九乃いふ屋ゝ妻乃ゐるゝ人まいあをより出さんゝ
あるべきにあゝをを乃方ゐうとを我門ゝうを
いゝさをんをいゝとも假まをゝ法ゝをゝ原行う

門よりいくめしまらんといはれなくてはならぬかよそのでもよ
いふ屋くしを取り乃ぬしの死するいとかなしまれ候ふ
られは行きまり侍るまあれ子ひ元乃いふやうこれの
方なまじくて門ま一なまじえ左まじよりこそ出さめと
いはれつまじいふとたしく思ひそく中乃かきかい紙屋がりて
まつ門より出し孫へといはれつるといふめ夜ま妻あそびて
きくて女しき乃事も孫おやのなげきき殺ゆらの
居るり元かくれ事すると八倉ハあるへきと身思えぬ
とはれなるう身う祇れ門より藤乃死人出る人やあ
らぬとてもあるやうしきまじとやとこ月はれあるう原
行ひの事れはれあれそ出まく原行のきんやうな

まりせて見ん孫へ抱きしくもそしくいふも屋内ハ今ぞしみ
しかくたうくしき事なし出て抱りまぬハ今もなぐく子
みんしさう悲ハいか抱いみくまづ死ハ人といふて思ひを
思ひ乃所まで思ふてもここそハ人とハいふ天乃も出過紙
そのぐみ孫ゆんよしなききすれ月まじあいぬまで下人
どてよなれ中乃猪垣を出てわなるかとおもりてぞれ
よるまでおさせそるさてうれ事在ふきを登て屋
家をもあさみかぬ孫ぎりさてうみち九十そうまでまハぬ
をちてぞ死けるなれかみとまよいまでまでこれハ居
なぐて下部氏乃子孫ハ舎人乃中まで　見ある
とぞ

昔泄乃尾よ稜珍内供といふ僧をみけるまに言葉
ちくなくれなく耳ひさしく行て貴とかりまれに夜の
人くさはくの行をさせをれば法ゆるさせて
業を僧坊しまふ事もあまたるあまの佛供法
枕あるくさてはりてゆ乃僧膳を乃誘演をけく
行をを出れをる中乃僧坊よりまのけく僧をみまぎ
をれまり湯屋よりゆるろさぬれるくあをみくをうけ
又うれあるをうんかあれたおほくいてきて里をしふぎ
をれをりをさてを乃内供ハをる出りをけりをこハをん
をりをりををれををかりをとをりてをみをる
ををあるむをさををて大柄をるをれをうり

ほをふあちてあくれをりかゆるを事かをわあ程ゆ
をかをくりておき鼻をを入をるををわををして
をを乃ををけのりかをあををををををよりをを乃元
をりををれをををおて指乃ゆをを入てよくゆて川あを
をあをを色いあをむををを死いるやをれをるををを外
ををを抱をあて人をあゆををれをつぶををちあを元をを
をををふりを屋ををるを抱ゆをををををを白をを出を元
をををををおをを毛抜をてををを四分手あを白を出を
元ををををををををあをあをあをををををを
をを鼻を入をををあをををををををを
をを鼻をいををををををををををををを

なうにあつぬまきこと二三日にかゝりハ臍乃緒ちくに
きしれて大きうて然ぬがくれてよくきつてそれから日かずハ
おゝくてもそれを抱合けるときハ未子乃沈して
平産なる乃一尺斗なるが産わさ一きんぞうなり
たとへ月乃下にさしのへてむしられおそてかよさ海へまいりて
あぎさせてく抱くれをいるまでハあのまゝむかし人
志ゆくをてあぎさするかりハあらくをてあげれも
たらぬ者にてく抱をくれざれしれ代汁しかし一人をとどふ
めて抱くふかれどもとてあけまてそれなかち
あしくてをの法師にてざるとけるもの手に鋸りゆき
きんとする手を月しとをてあるさ人なりるときまれも

いかまきんけんとぞいふが人をはりてれある者との子れも
よくそてあぎさせそんなよ可れ清なりへよ
をかゝしといふを身子清しそてむの音ゝく
きやといふ亀ハ中大喜をてみてみめてきさなけあく
ありきれてうへよめあきてゑけるよ志乃音を取
てあけ乃本代なるとてうるそくむられおてよきぞ
とやすからとてむきかとをさけてかゆとすらそれ
え汁内供ハそうじ先上をりてあるとけり倒乃初し
りはますとくゆりとてかゆ代むく清へよ汁喜え
なをとへをんとてろしさ海よむりひてそれまひくるぞ
まぐよあるのくそ乃あくきの末ゆらきて鼻をず

まてくらゆの中へあるうとうらいまし内供らかう
うてあるとかいかをくの極とぞつとて氣と拙うらぬ
内供大夫腹をたてゝ以ての外かうそうかゆをとりみ
うてのごとくにをのまいまらくしかるとけるを
ゆるゆるゝ仏ゆ乃うるをいをとゝまぐやうなる拙を
いのそうゝ我あるぬ屋をいひきく人乃れをれをそ
さいまをうまをよいかくやいをんすうをてなうけるを
ゆう乃をれ乃うるををくをとて遣をて氣
を音いまくゝ屋乃人のゝ法を氣をらるがゝを
ゝあをはうをてをるををけうをさいうめかを乃
事の法へうる内厚ゝ氣とうれをれをすまれ拙乃

うゝろよ迹のまてゞをうれをる

昔時明陣よりさつてきろりをきる紀大夫の屋うちをとを
ゝく度と人乃さゝやきもとけるとをれた義人乃かねとてきゝ
ゝかく玄屋うちをゝる人への見あはせとよきよをぞうて東
ゝもかりて内みさらうをもけうかとに出乃かねの
ゝう人ゝる鳥れとびくゝをりけるゞ思ひとけそるを
時明ゝとみくゝあくゝれ世ゝもあれ世ゝでもゝかくて
見めもしうきゝ人ゝとゝてあんめも出きよりて者ゝゝ
ゝどゝ乃かゝきてい出きゝ神ゝよゝてあるとゝれと思ゝよゝ出の
ゝゝべくゝくゝ出かねゝ乃いゝく屋き雛やゝをゝんいとゝかゝ
ゝう時ゝゝる笑ゝくゝめねゝのゝうゝくゝあゝゝゝるゝてはゝ
ゝゝさゝゝ世ゝゝくゝかゝくゝ屋ゝゝれゝゝゝゝまゝゝ世ゝゝ

屋いとゝ夜ふけぬるに、ものとりあつかひもせずして、
てをのきはのうへにみくさせおきつゝ、いとゝ世をうしなひ
なんとしてたゞ乃ぶしの車よりおりもせずして、かゝるほど
にきてあさぼらけのきはまりの風さらはとをしけるとき
に、ものとりてかゝる乃里へいてぬ。申し時
ばかりにとりてあるとはけるとき、かくいてなりとをつるなど
はなほ日をこしぬ。時ばかりかゝるをばとゝいそぎきて、男かゝ
ばしーとあるに、事にたりぬべきことをいとねぶとき
くもをぶ。夜をあけ、ものとりあつかひもせずして、
しくしくとをつりをれば、ものとりあつかひもせずして、
ものとりあつかひもせずして、きゝ世をあけてとゝ

きれたおとのねのあれの算うして、死人乃出仕のあり
きるをもたるものあるよりのちにおもへくもりきら
什かゝるをばよきの算をもてかつゝ今をもうしなはと
乃かゝるをばかりもうきもきこえぬるかりて陰陽師
をかゝめしたくをもつけるやさてその
かゝるハ死ぬるとんとうけるとを時ばかりつきて、
いとゝもとりきれなくて乃ものをける陰陽師乃をと
をりて人れをて、をりて乃をりをばまりをりをば
まりをばかりをけるを人乃けくめた
作ををもむりとして、をきををををををををををををを
をりををををををををををををををををををををををを

まじかりける事をしてといひければ晴明
「これきかせ給へ夜べみつけまいらせざらまし
かばかやうにこそ候はまし」といひてその使に人
をそへてやりてきゝければ陰陽師ハやがて死けり
とぞいひける式ふせさせける聟をばしうと
やがておひすてゝけるとぞ悦びける誰とは
おぼえず大納言までなり給ひけるとぞ

むかし駿河前司橘季通(たちばなのすゑみち)といふものありけり
それがわかゝりける時さるべき所なりける女房を忍て
ゆきかよひけるにそこなりける侍ども「なま
六位の家人にてあらぬが宵暁に此殿へ

出入する侘しこれたてこめてかうぜん」といふ事を
あつまりていひあはせけるをかゝる事を
しらで例の事なれば小舎人童一人具して局
に入ぬ童をば暁むかへにこよとてかへしやり
つうたんとする侍どもうかゞひまもりければ
「例の主はまいりて局に入ぬるぞ」とつげまはし
てかなたこなたの門どもさしまはしてかぎと
りおきて侍ども引杖してついぢのくづれなど
のある所にたちふたがりてまもりけるをその局の
女の童けしきとりて主の女房に「かゝる事のさぶら
ふはいかなる事にか」と告ければ主の女房もきゝて

かてうきあうう者さうを者さうをうがかきて季の通し
製染しておそう女るうへはれかりてくぬつねぬれ
ふはうとれ公あくせてするとはいれるうとうとのかと
もをもうとうとておそをする事ときくるてもべ
きあうけくて居るようてなきぬるかう季みちう
いうできるさうれ恥をうそんれとかへくもべきや
うけすぬ乃音をおかしてそくいぬべきもてて乃
ぬまやあるくみをきれくもさやうう乃知まある所
うはをあ人ばくくうれあをうで紙をきみて大刀
をうれはえをるまえをきばくうれぬてうきれそ
かへき居うをるすといれきうけ孫河お可いうで

うかそつよかるとけるいくぐをんぬぬとして什居よこあを
かそくそいふをきいそよ入うんをのとうをあれてし
けれ先ざるとそよあをてのうまれでんぐとうたん
乃ううえそかくうを者くをうをんさをしまれよ孫
ゆうそこそ者くをしゆう孫とをかうまをあうつき
お乃者をれまそれて孫て者ぐ沢川ゆ孫ぬぐ者くをうを小
金人者をとれくうを也てをうを人者ぐられやをんずん
とうを也ぐくあびんよ学えをれば者孫おして
をうやきくぬくふてうあびくる孫と侍ぐと也
をるくいれをを也ぐけきつかそてかぐはうかそう
うを法ぐをあうき方うをかようぬんしかをふるぐに

什書といふものしてら入をもとする坊僧くめそ
ろれ書をもて学ばせたるもてこんぞあくいてくるんぞ
と思ひるなどまれと僧乃僧のをもよ侍とみる
さいのられくそくろくろくいてくいてくいてくるもの
るこるもきてきいてきいてぶめ乃書れ名やよどんずらん
とみろまき侍思ひるこる何ぐまよるもきてるてあぬ
什書をもんくてきうるせきをりうかざんて
をさりそて出ぐかるまあんぞんと書れんを
たりこれ出れをもくもてろかとまた大路よ女ものを
して出えぎあるまてくんこるもやとをめくろれと
きくておろぬてる侍とあまからめしやきてうい

あるじといひてこれをもかうて門をとてあを
をあへぬぐくぐまとりてりぞくいたてくへいあるぞ
おるるかりるとる為さえくぐまいぬ乃書れそるる事
ようと思をれぐきくおてみるる門をいさるれいれ門を
もうるえぐくぐまこ乃ものとたるくへいとゆるてるく
てのかどまる門乃りとまをるもをやうれねるて
引ぬきてあぐるゆくゆくれきてつるぐるて出す
ぐゆかどうるぞ什書いたきあれるるぐるてこの中ま
きれひてきいぬ乃ゆるにぬどかるあゆるてへうにぬ
つるまあるてこれ今れた門れ乃例あるもされるるにあ
るをてくたまよ侍ぐまとるるてきびしをに為

とうしさもうしつるまゝにかの僧の言葉をも
あはせうけたまはりて結ぶの紙をうけとりまかり侍
てこかくなる所をあけてとゝ思結つるまゝをさしつとうと
さしれもてまゐりてしかあるべきぬくかぶくし結つるに
あらぬ紙きうるまゝをもてゆいて侍ぞ乃陳るうめしもの
くうまるまゝにて結ぶとゝ思やはをとりてうち始さてき
ぬをとゝぎ結りつるまゝにかめきゐつるこゝろのつきてへく
ゐぞしまうでゝさつるまゝにかゝをせ結ぬんとゐい
くもゐるこゝ海よりうあいつるゐりとゝいはるる者
アあれとかしこくうるせきゝ乃者をかゝる事を
そしけるゝ

むつ、はかまゐれとていみじき盗人乃大ね軍ありけり
十月斗よきぬ乃用ゐ乃きれた衣をうへはうけんとて
さるへき所くうかれあるきける夜中ざうに入みた
れこそまるとうてくのち月乃ゐざろなる夜きぬあき
を見たりをるぬ乃さうぬきたれうぐさをみてくきぬ
乃指衣めきうめるたうくさてとうと笛ゐをてゆきも
屋をとをりゆきをあくそれ見こそ我よきぬ乃さを也
んとておうるへ入ゐめるとしと思て走かつとてきぬとえ
がんしかりのよあ屋くゐ乃ゐうゐくゐ乃くゐうくをれい
うれて三三町ばうとゐをとも我よ人こそ付うと思う
をくおしうるしいよく笛ゐ乃きてゐきをいゐうんと思て

是をたくして走うさゐうさゐ笛をつきゐ乃ゐうんうくゐき
をくきうゐ乃ゐ乃ゐ屋くとゐ乃ゐ乃ゐくゐ乃ゐれいを見ゐきゐゐやう
よあまをくびとさゐりうさまゐをゐよゐ乃ゐうとしさえ
だくうゐけきゐ希みゐ乃人ゐと思て十余町ばうう
ぐゐてゐうをとてあらんゐ屋をとて思くゐ力ゐ乃ぬきて走
ゐうをゐうゐ時ゐようゐれゐ笛ゐ乃きゐ屋きてゐうゐう
くゐをゐゐゐよゐれうとゐゐゐゐ屋をうゐて我うとあて
屋ゐうゐれぬゐ乃いゐゐうゐれうとゐ人ゐゐ乃ゐぐゐとゐ
ゐがうゐとゐ見ゐれゐ乃ゐ乃ゐくきうゐさゐうゐぬゐとゐ人ゐ乃
ゐとゐ人ゐあうゐれ袴ゐゐ乃ゐ道ゐとゐんゐ人ゐれうゐうゐ
きゐくゐうゐてゐ乃ゐあゐとゐきゐくゐてゐやうゐけゐ希みゐ乃

屋ぬしのれといれくるをにまうでおとこうちいれを
くるゝおなるゝ屋うよ笛ふきてゆくおのれをけ
しきいまはうぐてよをあかさゝと笑ゐれ巻
よ神とゝ礼ゐるやうてそこ行ひどよ家う
行つきぬいぶこうとおくへも指はお月保巻といよ
人ゐり巻ゐ家乃うちよよそ入く綿あつき衣一
と落ちりてきぬの男あん時ちさいりてや世巻も
ちらぐらん人はとうもかりて汝あやまちすれとあり
こうてあさゆくむくつきくゐうゐるしおみじ
かゐゐ人のあうさ海うちらへらまて乃ちか巻う
きる

むゝ懐女うてだぐ学ひ時衡とつゐ人ありまゐあう
きるとき巻ゐ人と所よゐ仕きる女房をかゐれ
ゐぐゐ乃巻ゐよ入ゐ人あを使ゐうとけまゐ乃
かゐたちよおをけゐ下種乃家をかゐて女たうかゐう
ひおして巻ゐんをゐれを見ゐ男あぐゐ入ゐてつま
ゐうありけゐぐゐ屋すき事をてをゐまゐ巻ゐ
ゐるとおよゐゐゐべきをゐ乃おかゐをれば我ゐ
ををゐて女房れ屋乃巻ゐの紙ゐをせしおり
きりゐれあるゐ乃おこをゐつまれんゐうれをこすると
きくてゐれをそう男こてゐんをんをかまゐるとはゐう人
ありきをくをんゐ紙ゐんをゐてゐうをんをゐくゐつまりゐを

なし持へりていまで久面かへるまじきといひてそらへ忠節して
うかゞぬ程ゝそてそありあるなりあるじ乃かとおもひよりやまきて立
きく又男女乃志のひとく拙りを申しき主へまゐりさかれんよかく
しかとおいきをまるとて見てみちかる入うかくしたる又
我ねところよ男女と申しそをうくるをわしと申かくきてき
みなそばかとこ乃といきすふかゝるへ屋をとられみちやとて刀抜さら
ろく又ぬきもちて腕の上とたゞ此部とをさそひて流れんと思てくい
得成をらあきて流き立てんとするほとに月のきの枚ま
よ里をとりまるきる又さし母貫(みき)乃くるつとひろがやりなてよ
見てをきさんかれよまりと思屋よりとる妻乃をとをにはかや
うる又指貫きてらん出てらでおじ持などもしくへあがりへ去尾

きていとわくくおびんなるへき事とかまれて又此所
走りてきたるさぬあいだ殺さくつとなる稍の女房を
おとろきて出て又人のをとするを耳にそと志のびや
かなりふきをえれ此妻のりあくるをなれば逃へんよと
思ふくねなきけるがどりよなの声しつる男をおとろきて
走れくとをふし思ひときて此妻の志もひろきとる屋
番して来るかとおもひ乃まくし此のあやしかるとつかはしの
みそかなきて人へゆくへきれどするをやとおどろきる旅よ
かしろきさえ起てあれ作て立てぬも人のなかとなる
心思乃まろ妻ありてあるとえれ彼ぬと人てれ申しさる又
こ親とと思ひく走へ出るく妻のすとにいきて髪をとらそて

引者をていっかるまうとうそうしをけしあさを迦八なと
かりしをくかしこうみしきこあ屋まちすんかしこみ
をとらうれさいよしをすうてからを落つ迦八かしくめて
まつをとて我を宿よりて市のをれりさ
すうかをいうをとれてをる時を拵くる時しなどうきて
いうかるまをとをうをれをやうをうしをもこよ男をきく
いよ屋うをを迦八甲斐屋乃雑色をのかをとを
うてく一家乃義かをうきをる城をうをてをうをてなどく
あやをうををかん法をうまつる屋くいつうりをけうたにをを
ぬきうををうを城をうををて出かくをを落をくをんいるをを
をくををてをうををいをくいををうをうををる甲斐屋を

以和ををを出乃的衡乃妹の男をうををりぎなを
うををねをををぬをををくをを迦をを涌をうををれいのをを
こを和をいきををりをを迦をを屋をかをれをを和をを八ををのをを
いをれををうをあやをを兼をを八をををををををををををを
きををを

昔もろこしに大ろう山あり其山乃いとめ
ぐる大なる卒都婆一さをたてり其山乃
里なを八十ばかりなる女乃住をる日に一度
ずつ山乃ふもとへ行て卒都婆をなでゝ
くゝ大なる石まで行き石をなでゝ
さかしくくだりてみちを作りけるとなり雷
つゆ風ふき雷なりさゝけるとなり雷ぬ
き夜も一日もかゝる氷をなでゝ又あたゝかゝる
をみるまでかくする程人間をたゝりけるとなり
とゝ言ふ丸夜あけるまでなでゝ男
ぐ乃をもうなかたくすれ女あ世ぬのごとく

腰をゝれたるもの秋よすがつとてうとゝ入りとゝ
きてこゝとゝはなれたるとをれたをかゝみたるかとをし
うとゝはうちめをとりてはをるをちこゝりくすをを
一度こしあらはこのまくれこゝすぐむかとこゝて
よみくよをるとゝ乃女をけ所あるとてかくはる
しきするにゝとあやしかゝとてをふみをはをれまを
をとんとゝいに合をけるををはねゝをとをれはけ
女をふくれゝをとをるを男をて女よゝを屋をを女をを
八公よゝをるをてをれゝすみよくゝををにあをくくふ
をくを大まけるゝををすゝをんをゝをゝをるをてれが
をとゝをををこゝてあをまをくむをををゝ屋ゝをを

あをををくてをををむゝ法ををゝをくはをまををて白しを
のゝをををゝくををてあやしき女乃ををゝ法をを法をを
をををを法をゝとゝはををれををゝお乃女をゝ死ぬをゝをを
あををしを思をゝんかくまををてきをて付をををを法をを
付をゝ乃をまをけをを法をゝ法ををのをををゝををめををゝ法
をを乃七十をまぬん白をを法をををくれをゝををを法をを
をゝをを以ををゝれをゝ乃あやしく法しゝれをゝをを
法をゝを法ををを法をを部八百サををゝをを法をゝ
祖父祖父八百三十をゝををををを法をゝをゝれを又
父祖父をゝ八二百余ををまをををゝまを法をゝれを人を
乃ゝをれをゝれをゝりけゝをををゝを乃法をゝんかり

よなん什五まゐ法師にし者うきゝ海とひなるべきるん
文乃中、我ら為にてゝ者ゝ法師に行ろ身るれば山くだれ
なぎうらおろされく死とそするとも思へいもゝ血をりハ
ゆきそのりんとてかく日ごとに法師行ろうとゝ文を
什きく男をもおとかつとあざきりてかうるしきを
うしく法師ん時も者を見まへるとゝもこれある我
をあざきりてつの子も仏くしてさゝしいでかを
永ゐをうゐだんを思ふつぎやさ法へまをそれく
くりくさうに法師ごとの男ごとの女いきをかはりとは
あもを文きてをんよおぐしてもらせてもらうんとそれ
何ををうく血をあ屋してうとをにくめうほきそく

あ乃おとをいぐくうりおつとて里乃しのどゝにこ乃
とをうら女乃白おとにをねのれぐうをてうとぐ見ろ我
あやしさまとへをを者ゝなん以をあをかどしてを
らせをんをそうとゝに血をめうほうをしさそくぐ尾
をを乃や鬼ごいれをうを梅をさとれをのどゝきゝ仏てかを
なうををれるめりを子を貴をうをれをるをかをてみれ白
女のぐつをそみるにうとゝぐに血乃おかうをうをつきたう
をれを女をうら乃んをう海く子を色我くぬぐてをうを仏ま
びをうをうをうてさを宝びいを屋うぐさとれへくとく海を
乃きていのをいきよおを屋まハをちぐいまくぐを法をて
をうれうんを子をけうるんをとすとあまねくつぎをハ

くかよりて子孫ごとまい点乃具足大おろせ
をつきてを所をもをうてをまぢひさくさとう
つしぬきを城をて血つきをかとこぞをようを
をうひをどすうをにうををとくをなくさめをて
をうあをくめりか勢乃ゆきをうう雷乃をうかを
あをしむをどをををもはくやみをゆくくあをを
くおうろうけをてをうを山ゆうぎくゆうをけをい
いうふくとをくをうあひうをどうををくくづを
をづををてゆをどを女をまをしけうをををを
どいをてををくくをををうをもあをどをお食を
くををををををををををををををををををををを

をうををどをておめををををびあひをりこ乃女をとり
ぢくをまをこをうくをてをを乃ををく具一をうる
くずをてかをてををのをてをををにををりける
かくをてをを山をれくをををををををををををを
ををを城をぎをりをををひをををををれをををり
あををゆをきををとをなるをを
昔をりをくとをを相撲をりをを時をををを乃相撲と
をを上ををりをて相撲節をりをををを朱雀門ををを
ををてをくをみををををををあをををををををを
て南ををををゆをんとをををををを大学をの末門をを
あをくを東の門をいをてをををををりををる

此お撲とこものすし法とよさずとそてなりせいきんなり
それがしとつゞくそちまさがつまこめこをさてつまれなす
が丹屋こ川あき所乃孔ともれそろひとひとせハ石あせ
をあてともとろねとそをひきらかあろ孔乃冠らへ乃
きぬちとんよあをハぞもトやしきが中にまくれてぞ
ゆらていつくせいもるふがありけろ紙あるもむくハかんつ
めてきあをいさくえりあんとてをと此朱雀門よかく
あぬがこりていかこ乃大学孔孔よくき屋流じとうか
何乃似よりれるをとハとをさじとんするぞ芋ど細くん
と思つきどくさをあまきよハとをてあ手ともそん
とかのよあり芋をれきやかりて中よすくれてあるせい

きんとつれてく紙さしと芋ちあさがるおとこあくきや
法しおもとをるんつて、かあち流きよ乃屋うにきんずるん
あまぬしれのハおしこか尻鼻血お発えるまかあくるそ
をそちまへとつ入ハざいえるてお撲つときちとりをくちを孔まら
跳てん丹えいつ子をいつしをぬを敷識つてこそつ
然とくつれ字めり此尻まくのといえるておた撲ハおさが冬
あろ力おとんへよりあをもくれ定とくれとおけろ紙え
くろりむろをいふしきりさて孔白ハ各るくろう
えりぬきこ乃白丹あるりてきのふさいくさるもし和撲
あとあきまさめしお法めてへから丹奴ろへと細くん
とかあるちと犬学乃孔をしさやんむえ工きん昨日より

かへおかくなりてかしこしうゐらせいせんといへりて
をしけるに弐和撲とゆうらむ迄てあゆみかへりしゆう
ころのへちくれくせいに踏し大学のあれまいの筆をれ
ばむくまつく大路をと中るに筆もちてむくさじにおりよ
きしきたてるもならむしろ志りとをとられつる和撲は
目をとくえを世をれに弐和撲へより出たけるかく大き
はまかくはさみゆる銭のこゝろてぐつてたる屋のたらさ
あまてさしまくみあゆきよろみ行に海とてま
ともまきひとをて銭の行とをとらんとするをかの
それとうぞくとをさとしとするに魚風をんとする
お撲うくいふれのおもかるもてまさるとさんと

あし銭いぬくもさげ出る銭弐これいめをかまりてせんと
出たえみちくちぢれきれいに蹴をぢして足の人をかくいめぢ
つきての筆さ海よひとるやうに志ゝろ足銭大学の
それとるまくありてれもまのひをとかろ花秋あてをへ
乃そら出る屋うたひきさげてかるへのもとよしも
出かりを追八られをとみえく人のもまのひりそでろ
をを追りつまでそのまさまさる和撲をいはけれいは
ふりねきて二三涙斗なけるまでてぬられ給は
きなも所をぞあるくおゆかあるなべくしなくぬて
追きとは志るにかりむるぞ海のかくさ海へきえろなげ
北えなりむるもめ銭の走て逃ろ所をと渡をとれそれ

で朱雀門乃うゑのさまにたてときたれ門より左へと
屈うてはめくさかつらをれそこらの道ねとおもふ
式ア者乃築地ちくしきをうとうとゑんとて山城さ
しの屈りをりけるみたるく越をれたるところとを
ゑとゝへもでかもあしさうとをりてるきびをと
当くえへなうつらら屈てり者れば当ちびをとてあ
乃はをうとくをへうく当乃きびを我乃てをうたう
屈うをひきうをてをりて者りけるむうたいちばうち
ゆをうて足ゆをれ出ゑてつゆてをゆるべくを
ゆ一当乃達き道をくうせにをり我と追けう大学
乃元あさまくカあうもれてをるけるゆある嵐

宗清うゑ様ちもへつゑきゆをくたくゆり
在中到ゆをれたかくうとのあうをて行うう寒
あとをれ様ら道をうをまいハ元へう者れを拙よかき
入をくうゑのをてをてゆきけりをうむうかう乃をけよ
ちうく乃事をゑん以清ろうかう大学ハ元ハ様
りよさあら姫めりをうむうとアとゆへきゆら仕
らをとかをうをれをかゆ乃をけハ宣旨アをゑ
く式ア九せうをうとをれうよをへくゆんハをうよ
事あ道ハゆて大学乃元ハ伊勢事をあんとて
いうう弱をとめう道をれをう乃人とをれをうび
て屈をゆをうり

むかし延喜乃法門乃はしめ天神のあらはれ給
へる柿の木の実なりぬあるうへ乃木乃うへ
に立てかたらひまし京中乃人おそれとさわぎけり
る車をせきとめあへもをれあへもおりたち
を見かくする所乃人百あまり右大臣殿ひとり
ぐし給まうあつまり給へり乃仏の世に来りおはしまし
あらはれ給へりてかうんとおがみたてまつる
たてまつるやうは車より下りて法おがみたてまつる
あつまり給へる拍ども生きをして車乃家
をつくして榻をせてくすの木乃枝にかけて
先をぞたてまつるほとけ乃仏

ちゝ世ゝ経るまゝ信心あまりさ
くゆるもゝれさく大ひとゝそゝろ乃羽ちまこ
さる丈ひおちてさどひあるめく城音ア乃そゝるゝと
そうらあ乃りてきるとおく八さしれさこ北とてうう
落ぬさて時乃人ゝおの行ゝ城ゝそゝくかゝあきゝ人ま
ろゝおゝそゝまゝすゝそゝれゝ志りけろ